事業企画部

部長　後藤 章

一年間の主な活動を報告します。

顕著な事業

２０２１年来、協会の一般社団法人化への事務作業を事務局と行ってきた結果、２０２３年３月の総会にて承認を得られ、２０２３年４月１日付で一般社団法人現代俳句協会が法務局に登記され、正式に発足した。

新規事業

１　会員増強活動を行った

会員増強委員会を永井江美子委員長で組織し、本年６月まで月１回のペースで開催した。委員会の討議結果を参考に、４月に中村会長名で各地区協会１０７名及び協会傘下の結社に３０２名、計４０９名の新たな会員推薦を依頼した。

２　全国の地区協会で使用可能な初心者講座向けパンフレット（講義用）が完成した。各地区協会の申込、個人での申し込みに対して無償で提供を始めた。

３　協会各賞歴代受賞者（存命者）一覧を作成し、角川編集部に送付し、作品依頼および角川俳句年鑑自選五句欄掲載の作家対象とするよう要請して、実現した。

継続事業

１　地区協会長インタビューシリーズ

中北海道（五十嵐秀彦会長）と鹿児島（高岡修会長）のインタビュー動画をアップした。

２　協会出版物のネット販売

会員の句集をはじめこれまで協会が制作した出版物も「妻恋坂書房」で販売を継続している。現在までの会員との販売契約数は昨年より４件増えて１７件（内２人が２冊同時契約）。

３　地区の広報誌の俳句作品を会長、副会長が選句して講評するページを好評につき継続している。

４　ＧＨＯＣ関係

ＧＨＯＣへの外部からの講師派遣依頼を１７件（昨年比３件増加）受けた。厳正な抽選を行い講師を決定した。その他は当該地区協会に人選を任せた。（先方から講師の条件指定案件が増加の為）

５　俳句ポスト関係

コロナ化にも関わらす今年も全国の図書館７９館（昨年比１８館増加）に増えた。毎月９０句前後の投句をいただいた。今後も続けていく予定である。

事業部

部長　大石雄鬼

事業部の活動は、伝統ある現代俳句講座と全句講評講座、そして令和３年に開始した全国スポーツ俳句コンクールである。

◇現代俳句講座

現代俳句講座は、昨年まではコロナ禍の影響でオンラインや時間制限下で行っていたが、本年は通常の形に戻し、第４６回、第４７回の２回実施した。

第４６回は令和４年１０月２９日（土）13:30～16:45 に、ゆいの森あらかわ「ゆいの森ホール」（東京都荒川区）で実施した。当初は９月２４日（土）を予定していたが、台風の接近により急遽中止、改めての開催となった。前半は秋尾敏氏による「知られざる１９世紀俳句史－桜井梅室の系譜」。天保の三大家の一人、桜井梅室を取り上げ、その弟子たちが近代俳句の基盤を作り上げる系譜を辿った。後半は恩田侑布子氏による「『渾沌の恋人（ラマン） 北斎の波、芭蕉の興』より、名句そぞろ歩き」。芭蕉の恋の句や名句の秘密に迫りながら、北斎画の鑑賞を融合させた叙情豊かな話を楽しむ講座となった。

第４７回は令和５年４月１６日（日）14:00～16:00 に、同じくゆいの森あらかわ「ゆいの森ホール」（東京都荒川区）で実施（国際部と共同事業、国際俳句協会共催）した。現代俳句講座としては初めて海外の講師をお招きした。講師はルーマニアの俳画家・俳人のイオン・コッドレスク氏。「芭蕉とブリューゲル～自然への２つのアプローチ」と題し、芭蕉の俳句とフランドルの絵画を比較鑑賞しながら、意外な共通点を解説した。

なお、両講座とも会場にある大スクリーンを活用し、楽しい迫力ある講座となった。

◇全句講評講座

全句講評講座は、オンラインと会場の２回行った。オンラインの講師は池田澄子氏。７月３０日（土）14:00～16:00、オンラインにより事前投句 2 句で 32 名が参加した。会員外も参加可とし、募集３日間で定員数に達成するなど大変好評であった。

２回目は神奈川県現代俳句協会の行事として堀田季可氏が講師を務めた。令和５年１月９日 13;00～16:00 に横浜市健康福祉センターにて開催。２２名が参加し、大変好評であった。

◇全国スポーツ俳句コンクール

全国スポーツ俳句コンテストは、「国民体育大会」と「全国障がい者スポーツ大会」の文化プログラムの一つとして日本スポーツ学術協会が主催、本協会が共催している。第２回を迎える本年は令和４年７月１日から８月１５日まで一般募集し、一般の部は 2,000 作品（応募者数５４２名）、高校生以下の部４８７作品（応募者数１５７名）の応募があった。入賞作品は、関係のホームページに掲載されたほか、『現代俳句』掲載並びに国体開催地の栃木県庁のギャラリーに展示された。

出版部

部長　津髙里永子

今年度も兜太新人賞受賞者、小田島渚氏への副賞としての句集が出版できた。印刷会社とデザイナーのご協力のもとに受賞者の句集制作に３０万円相当は協会が助成するというものだが、シンプルに且つセンスのよい装丁のものに仕上がったと自負している。シリーズ化して一つの記念碑として残していきたいという協会の意向もあり、受賞者の負担にならないことを第一の目標としている。これからの受賞者にもこのシリーズ化された句集出版を快く受け入れてくださることを願うのみである。

他の依頼者の句集も、なるべく低価格で出版することが私たち出版部の任務であるが、昨今、紙代の価格上昇に加えて各々のご要望が多様化して、時間的物理的にボランティアという域をかなり超えてきているのが悩みの種である。仕上がれば自分のことのように嬉しいのではあるが、部員の負担を軽減しなければ、出版部の明るい未来はないと思っている。

２０２２年７月から２０２３年６月までに発行された句集は原田要三句集『青蘆』、川名つぎお句集『焉（えん）』、そして金子兜太現代俳句新人賞受賞シリーズの第２弾として小田島渚句集『羽化の街』、椎名鳳人句集『母情』、片桐基城句集『相聞歌』の５冊。評論集として後藤章著『俳句空間の言語』、その他には津髙里永子（俳句）と荒川健一（写真）によるコラボ『句解（くどき）』など。なお、小田島渚句集『羽化の街』と後藤章著『俳句空間の言語』そして津髙里永子著『俳句の気持』は新企画として電子書籍としても出版した。現代俳句協会の機関誌『現代俳句』が電子書籍化されているのに連なったかたちとなっている。

最後に出版部員をご紹介。青島哲夫、足立喜美子、新井温子、上田桜、劒物劒二、塩谷人秀、津髙里永子、山地春眠子、そして新しく部員に加わった加那屋こあ氏。句集作りが大好きな仲間たちである。

毎月１回の出版部の打ち合わせに来られない方でもパソコンが少々できて、出版に興味のある方はぜひ、ご連絡を！

顕彰部

部長　宮崎斗士

顕彰部・事業活動報告（２０２２年６月～２０２３年５月）

○第７７回現代俳句協会賞
　受賞　林桂『百花控帖』・堀田季何『人類の午後』
　令和４年６月２５日（土）選考委員会を開催。まず委員全員が全体の総評および推薦する句集について述べた。一通り述べ合った後、あらためて各委員が賞に推す２冊を選出、投票した。その結果、最終候補に林桂『百花控帖』、堀田季何『人類の午後』、植田いく子『水でいる』の３冊が残った。
　その後討議を経て、林桂、堀田季何の２名に絞られ、最終投票として各委員がどちらか１名を選ぶことになった。その結果、林桂、堀田季何、ともに３票を獲得した。
　よって林桂、堀田季何の２名受賞を委員全員一致で決定した。

○第４２回現代俳句評論賞
　受賞　岡田一実「『杉田久女句集』を読む―ガイノクリティックスの視点から」
　令和４年７月２日（土）選考委員会を開催。応募総数１７編。選考会では、まず各委員が順番に今回の総評と個々の作品についての見解、評価について述べた。一通り述べ合った後、概ね高評価を得た９編につき、全委員による討議が行われた。
　討議終了後、あらためて各委員が賞に推す１編を選出、投票した。その結果、岡田一実「『杉田久女句集』を読む―ガイノクリティックスの視点から」が３票、後藤よしみ「序章　人間高柳重信　～戦前期からの出立～」が２票、神保と志ゆき『「田一枚植て立去る」のは誰か―追悼とコントラストの視点から―』が１票を獲得。これを受けさらに合議の末、岡田一実の評論賞受賞、後藤よしみの佳作受賞、神保と志ゆきの特別賞受賞を委員全員一致のもと決定した。

○第２３回現代俳句協会年度作品賞
受賞　松王かをり「海原へ」（３０句）
　令和４年７月１６日（土）選考委員会を開催。応募総数１７０編。まず各委員が順番に、今回の総評および特に推薦する作品とその推薦理由について述べた。
一通り述べ合った後討議を重ね、結果として１４編を最終候補に残すこととした。委員全員が、最終候補作１４編の中から５編を選び順位を付した上で投票（第１位５点～第５位１点と換算）。その結果最高点（１８点）を獲得した松王かをり「海原へ」の現代俳句協会年度作品賞受賞、次点（１４点）の川村五子「冬帝の投網」の佳作受賞を委員全員一致で決定した。

○第２３回現代俳句大賞
受賞　齋藤愼爾

令和５年２月１５日（水）選考委員会を開催。中村和弘会長を委員長とした選考委員１０名が討議を重ねた結果、全員一致にて齋藤愼爾の受賞が決定した。

〇第４０回兜太現代俳句新人賞
受賞　土井探花「こころの孤島」（５０句）
今年度の選考委員会は、令和５年２月１８日（土）東京内幸町・日本記者クラブ十階ホールにて公開選考会という形で開催された。
応募総数は７０編。選考委員会に先立って第１次予選、第２次予選を実施。その結果、内野義悠「息づかひ」、加藤絵里子「神無月」、楠本奇蹄「長き弔ひ」、蒋草馬「たらの話」、土井探花「こころの孤島」の計５編が最終候補作に決定した。
選考委員会当日は最終候補作を１編ずつ選考委員全員が講評、合議。一通り意見を述べ合った後、委員全員が５編の中より特に推薦する作品２編を順位を付けた上で投票した（第１位を２点、第２位を１点と換算）。その結果最高点（７点）を獲得した土井探花「こころの孤島」の兜太現代俳句新人賞受賞、および他の最終候補作４編を兜太現代俳句新人賞佳作とする旨を委員全員一致で決定した。

広報部

部長　佐怒賀正美

広報部のこの１年間の事業報告
（令和４年７月１日～令和５年６月３０日）

この１年間の広報部の活動は、コロナ禍の広がりを注視しながら、前年に引き続き、主にオンラインを活用した情報発信を余儀なくされました。一方で、ズーム会議を主体としながらも広報部会の対面形式での再開、あるいは兜太現代俳句新人賞の公開選考会（於：日本記者クラブ）の開催も実現しました。

まず、月例の広報部会では、幹事会（＝令和５年度からは理事会）で討議された重要事項の報告に加え、部員それぞれの意見や今後の企画内容などを検討する形を取りました。協会アカウントの Twitter による発信は、情報の正確性や臨機応変の対応性などを勘案し、年度途中から新事務局の方に担当が移動しました。事務局の新しいスタッフに感謝しています。また、事業部から「地区協会長インタビュー」の担当を広報部で引き受けることになり、鹿児島県地区協会長・高岡修さんのインタビューを Facebook に発表しました。現代俳句協会の「俳句自由」を支えてきたものを各会長にそれぞれの立ち位置から自由に語っていただき、地区協の活性化に加えて、特に若い会員のこれからの俳句活動に少しでも参考になればとの思いがあります。今後ともこのシリーズは継続いたします。

次に、俳句総合誌編集者向け定例会見については、令和４年７月１３日と９月２９日の２回開催しました。さらに、令和５年２月１９日には、兜太現代俳句新人賞の公開選考会及び懇親会を日本記者クラブで行いました。
７月の定例会見では、現代俳句協会賞受賞者（林桂・堀田季何）及び評論賞受賞者（岡田一実）の紹介、９月の会見では年度作品賞受賞者（松王かをり）の紹介および「第３回センバツ！全国高校生即吟俳句選手権」の結果報告（神野紗希）を行いました。受賞者と編集者の橋渡しを兼ねた貴重な定例会見を通して、受賞者の個性はもちろんのこと、現代俳句協会の多様な作風もじかに伝えていけたらと思っています。また、マスコミ関係を招いての日本記者クラブにおける兜太現代俳句新人賞（受賞者：土井探花）の公開選考会は初めての試みでしたが、各選考委員の発言も率直で充実しており、対外発信力は十分にあったと思います。選考委員会後の懇親会を含めて、若い作家の今後の活動を今後もバックアップしてまいります。

尚、本年度４月から広報部の海外担当部（担当部長：木村聡雄）が、国際部として独立しました。これまで毎回、国際俳句交流協会理事会、及び俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会理事会に出席してきましたが、今後は、加えて、現代俳句協会独自の国際俳句交流の企画がさらに積極的に推進されることと期待しています。さっそく、４月１４日及び１６日には、ルーマニアの俳画家・俳人のイオン・コッドレスク（Ion Codrescu）氏の来日記

念講演を、江東区芭蕉記念館及びゆいの森あらかわにて、国際俳句協会(HIA)及び江東区／荒川区と連携しながら企画を実現し、大変好評のうちに無事に終了することができました。（イオン氏はルーマニア・コンスタンツァ俳句協会の創立者であり前会長でもありました。）

ＩＴの進化に伴い、広報の形も柔軟に対応していく時代になっています。コロナ禍の鎮静化に伴い、新しいイベント企画なども考えていきたいと思います。

国際部

部長　木村聡雄

国際部はコロナ禍の間は休部となって、広報部の一部門「海外担当」として情報収集・発信を行ってきた。とはいえ、周知のように俳句が世界文学のひとつとして受け入れられ各国語で書かれている状況から、２１世紀の俳句には国際的視野が不可欠という中村会長の考えを受けてこのたび国際部再出発となった。

日本は５月以降コロナの影響から脱却しつつあるとはいえ、海外関連の文化事業が完全に元に戻るにはもう少し時間がかかりそうである。

再始動の主催イベントとしては、２０２３年３月に日越外交関係樹立５０周年記念事業として、ベトナム随一の俳句研究者グエン・ニュー氏を招いて「現代俳句：日本からベトナムへ」という題でベトナム俳句研究会を現代俳句協会図書室で開催した。久しぶりの国際俳句研究の場では参加者からは活発な質問や意見が出されて会は盛り上がりを見せた。

４月にはルーマニアの俳画家イオン・コッドレスク氏の講演会「芭蕉とブリューゲル～自然への二つのアプローチ」（２回）を芭蕉記念館とゆいのもり荒川にて、国際俳句協会、現俳事業部などとの共催で行なった。

また６月には「日本から世界へ羽ばたく現代俳句」（赤野四羽句集イタリア刊行イベント、青山ブックセンター本店）を後援した。俳句国際化を反映して来年度に向けてさらに国際部の企画を進め、本協会ホームページームページで告知して行く。会員の皆様のご支援を賜りたい。

年鑑部

部長　山本敏倖

◇『現代俳句年鑑　２０２３』の発行

参加者１６９３名、８４６５句を掲載できた。コロナ禍にもかかわらず、たくさんの応募を頂き心より御礼申し上げる。本年度から印刷所が新しくコールサック社に変更。内容も経費節減のため、協会運営部門の１年間の事業報告、全国各地の１年間の事業報告を現代俳句協会のホームページへ移行することになった。合わせて原稿募集を『現代俳句』に備え付けのハガキ以外に、メールによる応募を可能にした。参加者１６９３名の内、約２割（３８３名）がメールによる応募になった。

相変わらずコロナ禍は続いているが、新印刷所コールサック社のご協力により、ハガキによる応募とメールによる応募の混乱は危惧したほどには起らず、俗字は使用しないという基本姿勢は厳守しつつ、月３回の校正に揺るぎはない。誤字脱字、旧かな遣い・新かな遣いの修正に始まる原稿チェック。初校、再校、３校、念校をそれぞれ３人ずつで校閲している。それでも数件のミスを生じ、関係各位にはご迷惑をおかけした。コロナ禍のため、印刷所の日程に合わせながら少しでも念入りに校正をしようとすると、どうしても自宅への持ち帰っての作業が多くなった。

応募句は通常スタイルの５０音順に配列、１人５句とした。現代俳句５賞の顕彰作品集は、第２２回現代俳句大賞、第７７回現代俳句協会賞、第４２回現代俳句評論賞、第２３回現代俳句協会年度作品賞及び佳作を最新のものとし、他に会員の新刊案内、出版部作成の出版物案内、物故会員紹介を掲載している。また今回から現代俳句協会のホームページへ移行した、協会運営部門の事業報告と全国各地の事業報告は、そのまま年鑑部の責任で下版まで製作することになった。

さらに協会役員、顧問、名誉顧問、各委員会委員、各地区事務局一覧も掲載。結社（誌）の紹介を目的とした「俳句のプロムナード」は、今号では４４誌と前年より９誌減った。これは掲載費が印刷費の高騰により、２０００円値上がったのが主な要因だろう。それでも参加して下さった各結社のご協力には感謝して止まない。参加誌は減ったが、参加費は上回った。

◇『現代俳句年鑑　２０２４』の発行

今回はいきなり、毎年２月に実施している現代俳句協会年会費、年鑑参加者の振込用紙に手違いが生じ、参加者への応募が危ぶまれた。

◆今年度の編集スタッフは、現在、秋谷菊野、石口りんご、川崎果連、川名つぎお、田口武、羽村美和子、町野敦子、本杉康寿、森須蘭、山田ひかる、山本敏倖、我妻民雄。新メンバーに西本明未が加わり、１３名である。

青年部

部長　黒岩徳将

昨年度までの取り組みの総括・今年度以降の計画や抱負

〈基本活動〉
・定例句会「ゼロ句会」（４９歳以下）「イチ句会」（青年部限定）実施
・「現代俳句」の「翌檜篇」にて全国の会員の作品・文章を掲載

〈昨年度の取り組み〉
② 定常活動である「ゼロ句会」を、オンライン開催として継続。
②非定常活動として、全国的な高校・大学の休校措置などに伴い、俳句に懸ける全国の高校生・大学生を支援するという目的の元、「第３回センバツ！全国高等学校即吟俳句選手権」を開催。
③ネットでの投句・選句で完結する「イチ句会」を青年部内で月例実施。
④青年部若手メンバー対象の俳句ゼミを隔月ペースで開催。中村草田男、水原秋桜子句集、山本健吉俳論などを輪読。

〈今年度以降の活動〉
①青年部限定で俳句の現在的な問題を考えるトークイベント「イマココ現代俳句」を隔週で開催中。
②コロナ禍時代の救済措置としての役目は終えたと判断し、「センバツ！」は令和５年は非開催とした。高校生・大学生に協会を知ってもらう活動として「現代俳句協会全国大会」に「学生の部」を設立し、作品を募った。

〈勉強会開催テーマ・出演者〉
第１７５回「俳句を分断せよ　俳句における表現形式　PART１」
酒巻英一郎・九堂夜想・久留島元・川嶋ぱんだ
第１７６回「宇佐美魚目を知る？　虚実のあわいへの扉？」
中西亮太・後藤麻衣子・中田剛
第１７７回「川端茅舎を読む　露と浄土」
佐々木紺・岡田一実・若林哲哉・野住朋可
第１７８回「飯田龍太の風景　他郷を故郷のごとく」
黒岩徳将・加藤右馬・加藤絵里子

〈本年度の活動〉
「イマココ現代俳句」など、イベントの開催頻度を昨年より増加させることで「今、俳句で何に関心があるか？」の意見交換をより活発にできればと考えている。

研修部

部長　なつはづき

研修部の事業の柱は４つある。

① 研修通信俳句会

会員限定。年６回、紙媒体で行う互選の句会。会員とは別に講師が２名。第２８期は羽村美和子氏、鈴木牛後氏、第２９期は衣川次郎氏、佐藤文子氏。毎期７０名弱の全国の会員が切磋琢磨している。近年、デジタル化の傾向があるが、紙媒体での通信句会の需要の受け皿として今後も一定数の需要があると思われる。実際、継続者も多いが今年度は新規での入会者の割合が増加している。

② 通信添削教室

協会内外から通信にて添削を行っている。令和５年７月に講師を増やし現在は９名体制。郵便の他にメールでの受付をしたところ、徐々に利用者は増えている。

③ 俳句教室

会員限定。現代俳句協会の図書室にて行う３つの教室（月曜・秋尾敏氏／水曜・こしのゆみこ氏／金曜・大井恒行氏）に加え、インターネットでの句会（堀田季何氏）もあり、現在４教室ある。講義中心、句会中心など教室により特色がある。各教室は最長２年と限定し、講師も順次入れ替える予定。それによってさまざまな講師の教室を体験できる。令和６年度（６年４月～）に講師を一新する。

④ 初心者講座

毎年４月開講。通信（動画配信・添削・ネット句会）の講座。講師は後藤章氏。協会内外から募集。毎回定員の２０名がすぐ埋まる人気講座。初心者講座の需要が高いことを見込んで今年度は新たに１０月開講の講座を開催予定。（講師は五十嵐秀彦氏）。１句鑑賞と句会を組み合わせた内容で、初心者はもちろん学び直しの人も受け入れられる講座とする。

ＩＴ部

部長　堀田季何

我が国における近年の情報通信機器の高い世帯保有率、及び、高齢者層におけるインターネット利用率の増加を背景に、また、近年の疫禍を機に、ＩＴ部は、部の枠組みを超えた一種のインフラ部署として、協会全体のデジタル化及びＤＸを急速に推進してきた。２０２３年になって、ようやく過去数年間の各種取組が浸透し、定常化した感がある。

新しく導入されたのは、現代俳句全国大会用投句システムの構築であり、同大会にオンラインで参加、投句できるようになった。昨年導入された現代俳句年鑑用投句システムを改変、転用することで、安価に構築できた。投句者の手間だけでなく、事務局の人的及び経済的負担も軽減される。

その他は、概ね定常的な実施である。『現代俳句年鑑２０２４』用の投句システム設置（前年用のものを更新して使用）、電子書籍オンラインストア「Reader Store」における会員誌『現代俳句』電子版の提供及び一部の会員書籍電子版の販売、ホームページ上のオンライン書店「妻恋坂書房」での協会出版物や協会員の書籍の販売、ＩＴ部開催の２種類のインターネット句会（協会員の句会はＩＴ部長による総評付）、青年部・地区協・関係結社開催のインターネット句会へのシステム貸出、地区協会長インタビューシリーズの公開、協会ホームページ上に設置されたショッピングカート・システム及び連携した決済システムによる各種支払い対応、ホームページ自体の更新、他部のＩＴコンサルティングや補佐、事務局のＩＴ保守管理等を含む。